

鳥栖市誌研究編 第5集

汽笛の記憶

鉄道員のオーラル・ヒストリー

鳥栖市誌編纂委員会
中村 尚史 編



鳥栖市誌研究編 第5集

汽笛の記憶

鉄道員のオーラル・ヒストリー

刊行にあたって

市政50周年記念事業の一環として平成13年度から開始しました『鳥栖市誌』編纂事業は、「多様な生活と文化」「人・物・技術の交流と広がり」をテーマとして作業を進め、5年目になります。すでに『鳥栖市誌』本編1巻・2巻と資料編5～10集を刊行し、お陰様でいずれも好評をいただいております。本編続巻につきましても執筆・編集作業を進めております。また、本編の刊行とともに編纂事業の重要な方針として、地域の貴重な資料・研究をまとめた「資料編」「研究編」の充実をはかっております。

鹿児島本線と長崎線が分岐する鳥栖駅には、かつて広大な貨物操車場と様々な現業機関がありました。それらは自動車輸送の発達と国鉄民営化によって縮小・合理化されましたが、鳥栖駅東に移転された「268号機関車」や鳥栖駅の駅舎やホームによって「鉄道の町」鳥栖を想起することができます。しかし、当時の資料を十分に収集できず、『鳥栖市誌』第4巻執筆のために鳥栖市やその周辺に在住の国鉄OBの方々に聞き取り調査を行いました。

本書は、その成果を収録したのですが、オーラル・ヒストリー（口述史）の手法によって戦前から戦後、さらには分割民営化前の激動期の鳥栖地域を中心とした国鉄の歴史を明らかにするという点から、研究編といたしました。

本書の刊行にあたりましては、聞き取り調査にご協力いただきました国鉄OBの方々に感謝申し上げますとともに、調査から編集まで行なっていたいただいた中村尚史氏のご苦勞に対し謝意を表します。

今後とも『鳥栖市誌』本編はもちろんのこと、資料編・研究編の充実もはかってまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年12月

鳥栖市誌編纂委員会委員長 米倉利昭

はしがき

鳥栖市教育委員会の市誌編纂事務局から「鉄道の歴史的な流れの編纂を中村先生にお願いしている。そのため職員の聞き取り調査をしたいと仰るので、適任の方の推薦をお願いしたい」と依頼された。

果たして私の推薦で妥当な形ができるか随分迷ったが、頼りたい先輩は既に故人になられたか、若干認知症の傾向にあるなどご相談できない状況にもあり、鉄道OB会鳥栖支部の中で適任と思われる方を列挙した。国有鉄道時代、鳥栖地区は門司鉄道局に所属していたが、昭和24年公共企業体に移行しても、業務形態はほとんど変わらず、鉄道管理局の総務部・経理部の業務は現場機関でも庶務または事務担当が実務処理をしていたので相互に理解できた。しかし、実際の日常業務は営業部・運転部・施設部・電気部に分かれ、一部共通する規程はあるものの、それぞれの現場と直結した縦割り制度であった。すなわち、営業部は駅・車掌区・公安室、運転部は機関区・客貨車区、施設部は保線区・建築区、電気部は電気区・信号区・通信区などで、現場相互が連係した業務の遂行はほとんどなく、言うならばそれぞれが独立守備隊で、わずかにこれと連絡調整する機関として運輸長室があった。そのため各現場機関に所属する職員は自分の駅区の業務内容には精通するが、他の駅区のこととはほとんど知悉しないのが通例であった。

したがって聞き取り調査のため推薦した人びとは、それぞれの機関である程度のエキスパートであり、鉄道OB会では積極的にボランティア活動に協力する方々を選定して推薦したが、現職時代を通じてその駅区の代表的なエキスパートであったかどうかについては完全な自信があったわけではない。聞き取り調査の中で「私よりは〇〇さんが適任ではないか」と直言してくださった方もおられたようにお聞きした。しかし、皆さんおおよそ適任の方々であったと確信している。

鉄道の歴史の流れの中で誠に残念でならないのは、民営化の時点の混乱で駅区の歴史を明細に記録した駅史や区史の所在が全く不明になり探しようがなくなったことで、残念であるとともに恥ずかしい次第である。九州旅客鉄道(株)にも駅長を通じて、種々の調査をお願いしたが、これ以上の調査は無理であると正式に断られ、断念せざるを得なかった。

平成18年12月

綾部 綱雄

目次

凡例

序章	鉄道員の世界を探る	005
----	-----------	-----

東京大学社会科学研究所 中村尚史

第1章	機関車とともに	025
-----	---------	-----

――機関区――

齊藤富美男 027 轟木慧志 090 中村源吾 113 宮原哲巳 130

第2章	「発車オーライ」	155
-----	----------	-----

――駅・車掌区――

綾部綱雄 157 久保利夫 181 廣瀬廣幸 202 山本隆邦 261 座談会Ⅰ 285 座談会Ⅱ 301 深町信夫 251

第3章	鉄道を支えた人びと	311
-----	-----------	-----

――保線区・電力区・客貨車区・物資部――

松隈郁男 313 成富辰次郎 336 白水良典 368 徳渕謹次 387

第4章	「私たちは俺たちは」	403
-----	------------	-----

――労働組合――

村上義光 405 稲田芳朗 466 補論 行政機関職員定員法と現場 490

年表・資料

あとがき

凡例

1. 本書は、鳥栖市誌編纂事業のうち研究編第5集として発刊するものである。
2. 本書には、鳥栖を中心に勤務された国鉄OBを対象に行ったヒアリングの記録を収録した。また、国鉄の様々な職種に対する理解を助けるため、できる限り多くの職能の方々を対象とした。
3. ヒアリングは、主に本市誌執筆委員中村尚史（東京大学社会科学研究所助教授）が行い、本市教育委員会
の藤瀬禎博・久山高史・大庭敏男（以上、生涯学習課）、田中大介（当生涯学習課、現総務部情報管理課）が
補佐した。
4. ヒアリングはICレコーダに録音し、松雪由紀代（生涯学習課嘱託）・大庭が原稿に起こした。
5. 本書に掲載した記録は、起稿したものを対象者が補足等を行い、中村・大庭が編集した。
6. 写真・図版等は、その出典あるいは所有者を逐次記した。

序章 鉄道員の世界をさぐる

1 鉄道の作業現場を考える―課題の設定

本研究の主たる目的は、佐賀県鳥栖市域で日本国有鉄道(国鉄と略)勤務を経験された様々な職種と世代の方々を対象として、鉄道員の仕事と意識に関する聞き取り調査を行い、戦前から戦後にいたる鉄道の作業現場の内実とその変化を明らかにすることにある。

従来の鉄道史研究において、戦時期から戦後にかけての作業現場の実態解明は、二重の意味で立ち後れてきた。まず第一に、1970年代以降、活発な展開を遂げてきた鉄道史研究の中で、鉄道経営の内部に踏み込んだ労働史研究が手薄であったという問題点が指摘できる。とくに鉄道運営の末端を支えた鉄道員の生活世界については、吉田文・広田照幸編『職業と選抜の歴史社会学』(2004年、世織書房)が、戦前期の国鉄現業職員の選抜・養成メカニズムの解明を通して、鉄道作業現場のあり方と労働者の意識を分析している以外、先行研究が見あたらない。また第二の問題点として、数少ない鉄道労働史の研究も、主として戦前期を扱った研究が多く¹、戦時期から戦後にかけての研究が乏しかった点が指摘できる。その数少ない例外が、禹宗杅『身分の取引』と日本の雇用慣行』(2003年、日本経済評論社)であるが、同書は戦後の国鉄における雇用慣行の分析に焦点を当てた研究であり、地方の作業現場の実態を包括的に検討しようという本書とは、議論の次元が異なっている。またもう一つの研究潮流である兵藤釗らの国鉄労働運動史研究²は、基本的に本社―本部関係を軸とする中央の労使関係が主たる研究対象となっており、作業現場のレベルにまでは踏み込んでいない。日本国有鉄道が日本全国を網羅する巨大な公企業体であったことを考えれば、研究者がまず最初に中央の意志決定のあり方に注目することは、当然のことである。しかしながら高度に組織化された鉄道経営においては、末端における作業現場のあり方が、システム全体に影響を及ぼす可能性を秘めている。事実、本文中で登場する労組指導者の証言が示すとおり、九州の片隅におけるたった一人の抵抗によって、本州の列車まで止まることがありえたのである³。その意味でも、我々は一地方の作業現場の実態を、戦前から

1 武知京三(1992)『近代日本交通労働史研究』日本経済評論社

労働運動史研究会編(1979)『黎明期日本労働運動の再検討』労働旬報社 などを参照。

2 兵藤釗(1997)『労働の戦後史上・下』東京大学出版会

同(1982)『職場の労使関係と労働組合』『戦後労働組合運動史論』(清水慎三編)日本評論社

兵藤釗・早川征一郎・光岡博美・遠藤公嗣(1981)『国有鉄道の労働運動』『転換期における労使関係の実態』(労使関係調査会編)東京大学出版会 などを参照。

3 本書第4章の稲田芳朗氏インタビューを参照。

あとがき

今回の調査で私たちは、あくまで現場の記憶を、できるだけ忠実に記録することにこだわった。鳥栖市誌「研究編」という枠組みにもかかわらず、本文をインタビュー形式のままで記述したのも、そのためである。近年、歴史学の分野でも盛んになってきたオーラル・ヒストリーの方法が、こうした調査研究を後押ししてくれた。そして何よりも、調査対象者としてご協力いただいた皆さんのおかげで、豊富な内容を含むインタビューが可能になった。本書の評価については、市民の皆さんや碩学諸賢にゆだねるが、少なくとも私はこの調査が楽しくて仕方がなかった。楽しい思い出と一緒に笑い、苦しかった思い出、つらかった思い出と一緒に涙ぐみながら、鉄道員の記憶を綴っていく作業は得難い体験であった。こうした機会を与えていただいた鳥栖市誌編纂委員会に心からお礼を申し上げます。

本書ができる過程では、候補者の選定から調査、そしてテキストの作成にいたるまで、鳥栖市誌編纂室と日本鉄道OB会鳥栖支部の皆様が本当にお世話になった。なかでも鉄道OB会鳥栖支部会長の綾部綱雄氏は、座談会の設定から調査対象者の選定、さらにはご本人のインタビュー調査と、多方面にわたって献身的にご協力いただいた。また本書の共同編集者でもある鳥栖市誌編纂室の大庭敏男氏は、夏と冬にしか鳥栖に現れない私のかわりに、調査対象者との交渉や予備調査からテープ起こしにいたるまで、一手に引き受けていただいた。ご両人のご尽力がなければ、本書は到底、完成しなかったであろう。なお長期間にわたる調査の過程では、藤瀬禎博氏や田中大介氏、松雪由紀代氏といった歴代の市誌編纂室担当者の方々にも同様の協力をお願いした。さらに齊藤富美男氏のインタビューにご参加いただいた久山高史氏は、機関車に対する私の乏しい知識を補っていただいた。これらご協力いただいた全ての方々に、心からお礼を申し上げます。

最後に本書を故・松浦根土氏の御霊前に献げさせていただきたい。本来、鳥栖市誌における戦後国鉄の歴史は、松浦さんの担当であった。ところが道半ばにして松浦さんがご逝去されたため、かわって私が本書を編集することになったのである。足かけ5年におよぶ調査の過程で、行き詰まりそうになると松浦さんの柔和な笑顔が脳裏をよぎり、私を励ましてくれた。本書の内容が松浦さんのお気に召すかどうか甚だ不安ではあるが、一つの報告書とさせていただきます。ご冥福をお祈りしたい。

2006年12月

中村 尚史

〔編著者略歴〕

中村 尚史 (なかむら なおふみ)

1966 年 熊本県生まれ

1994 年 九州大学大学院文学研究科史学専攻博士課程単位取得

1997 年 博士 (文学、九州大学)

現 在 東京大学社会科学研究所・助教授

専 門 日本経営史、鉄道業史

著 書 『日本鉄道業の形成— 1869 ～ 1894 年—』日本経済評論社、1998 年
『商品流通の近代史』日本経済評論社、2003 年 (共編著) ほか

鳥栖市誌研究編 第5集

汽笛の記憶

平成18年12月25日

編集 鳥栖市誌編纂委員会

中村 尚史

発行 鳥栖市

佐賀県鳥栖市宿町1118番地

印刷 有限会社久光印刷

佐賀県鳥栖市田代昌町477-6

頒 価 2500円

